

賀茂真淵の業績についての一考察

A Consideration of Kamo no Mabuchi's Achievements

神谷 司

要 約

賀茂真淵の主な業績は、『万葉集』に対してわかりやすい注釈をつけたことと優れた万葉調和歌を多数詠んだことである。真淵は、長年にわたり万葉集を研究し、わかりやすい注釈をつけている。また、歌人としてもすぐれた和歌を詠んでいる。真淵の著書は数多くあり、『万葉考』『冠辞考』『歌意考』『国意考』『語意考』がある。これらの著書は、その後の国学の研究に大いに貢献している。さらに、真淵は、「五十音図」の進展に寄与したり、多くの門人を育てたりしている。真淵が育てた門人たちが、真淵が行った研究をさらに進めていくなどして、日本の国学の発展に寄与した。

今回は、その賀茂真淵の業績の一部を考察する。

キーワード：賀茂真淵、万葉集、五十音図、松阪の一夜、冠辞考

1. 導 入

国学の「三哲」「四大人」と呼ばれた賀茂真淵は、国学を発展させた学者である。国学とは、「『古事記』『日本書紀』『万葉集』などの日本の古典を研究することによって、儒教や仏教渡来以前の日本人の物の見方や考え方を明らかにし、そこに日本人の生き方を見い出そうとした学問」（『浜松市立賀茂真淵記念館「今、国学の呼びかけるもの」』から一部引用）である。賀茂真淵には、数多くの著書があり、その著書には『万葉考』『冠辞考』『歌意考』『国意考』『語意考』がある。

今回は、この賀茂真淵の業績について論説していく。

2. 考 察

2-1. 万葉集について

賀茂真淵の業績としては、「『万葉集』に対する注釈と万葉調和歌」を詠んだことがあり、その評価としては、「真淵は契沖や春満らの行った『万葉集』をはじめとする上代文

学の研究を継承して実証的な語釈を行いつつ、歌人として持ち前の感覚による読解を加えることにより、すぐれた注釈を生みだし、さらにはそれを創作にも活かしたためにすぐれた上代風の和歌を詠みことができた」「研究経験と歌の素養に基づいて詠まれた真淵の万葉調和歌は、契沖や春満にはなし得なかったものとして、革新的な意義が指摘されてもいる」（賀茂真淵の研究）高野奈未著、15 ページより引用）とある。

賀茂真淵は、万葉集の研究を行った学者であるとともに、優れた和歌を詠む歌人であった。真淵は、歌人としても素晴らしい和歌をたくさん詠んでいる。また、真淵自身の持ち前の優れた感性や感覚によって、書物や和歌を読解することで、わかりやすい注釈をつけることができている。

真淵は、自分自身が歌人として、実際に和歌を詠んでいたことから、他の歌人の詠んだ歌の意味や気持ち、その背景などを読み取りやすかったと思われる。同じ歌人として他の

歌人の気持ちをより深く理解したのではないか。これが他の学者がなし得なかったことを、真淵が成し遂げた理由の一つではないだろうか。さらに、真淵は、自らが読み解いた書物や和歌の内容を、自らが和歌を詠む際に活用しており、真淵自身がより良い和歌を産み出す源にもなっている。

また、真淵の注釈は、他の人たちにとっても理解しやすいものであったことから、他の学者や門人たちの理解が進み、真淵の行った研究をさらに進めることができたり、門人たちがより良い和歌を詠むことができたのであろう。

2-2. 五十音図の作成について

賀茂真淵は、日本語の五十音図の作成にも貢献しており、その業績は、「日本語の基礎「あいうえお」の五十音図は、真淵をはじめ国学者たちによる百五十年余の研究によってできあがったものです。…（中略）…最初に「五十音図」の名称を使ったのは悉曇学を学んだ契沖による元禄八年（一六九三）にまとめられた『和字正濫鈔』でした。

これを発展させたのは真淵の『語意考』です。…（中略）…真淵は「古語を釈には、五十音韻を委しくすべし」と述べていますが、真淵最後の著作としての『語意考』で学問体系の根底にある言語の学についてまとめ、明和六年（一七八九）の二月に完稿したとされています。

…（中略）…『語意考』は総説、活用論、語義説明の三構成で成り立っています。

真淵の功績は「五十音図」をもとに、格段に名前を付けたこと、活用を統一的にとらえたことです。

国語の語法研究は、この後、本居宣長ら国学者たちによって飛躍的な進展を遂げますが、近代的科学への橋渡しをした真淵の『語意考』の歴史的意義は大きいものがあります。（『日本語の基礎「五十音図」をつくった賀茂真淵・

国学者たち』より一部引用）」とある。

ここにあるように「近代的科学への橋渡しをした真淵の『語意考』の歴史的意義は大きい」と思われる。真淵は、「五十音図」の格段に名前を付与したり、活用を統一的にとらえたりした功績があり、これによって後の進展に大きく貢献している。真淵は、土台として存在した「五十音図」を研究して発展させ、それを後世のさらなる発展につなげており、その功績は大きく、評価できるものである。

真淵は、「五十音図」をそれまでよりも使用しやすくし、また、理解しやすいものとした。真淵は、「五十音図」の大きな進展については後世にゆだねたものの、その進展に大きく寄与し、『語意考』という著作を世に出して国語の語法研究の進展の一翼を担ったことは高く評価できる。この真淵の『語意考』により、本居宣長をはじめとした国学者がスムーズに研究を進めることができるようになったり、研究がしやすい状況や「五十音図」を理解しやすい状況を作り出したりと、国語の語法研究の後押しをしている。

五十音は、現在も使用されており、日本人には馴染みの深いものになっている。また、五十音は、リズムが良く、また五十音順と言われるように順番を付与する際にも幅広く使われている。現在、我々が五十音図をスムーズに使用できるのは真淵の功績によるものであると言っても過言ではない。

2-3. 真淵の門人について

賀茂真淵の弟子の育て方については、「たくさんさんの弟子が真淵翁を先生とあおぎ、教えを受けました。340人の門人がいるといわれています。門人にていねいに手紙のやりとりで答え、学習会では、身分や男女の区別なくよいところをみとめ、女性の門人が100名以上いました。女性は親や夫にしたがうのが当たり前という当時では、大変めずらしいことです。（ようこそ浜松市立賀茂真淵記念館へ

（資料）から一部引用）」とある。

賀茂真淵はたくさんの弟子を育てている。この育てられた弟子たちにより、賀茂真淵の研究がさらに発展するなど真淵の貢献度は大きい。また、身分、男女の区別なく良いところを認めていたことは大変素晴らしいことであり、ここからさらに良いものが生まれていったと思われる。

賀茂真淵は、様々な場面で「自由に話せる」ことを大切にしており、これは、他人の考えや意見から新しい着想や考え方を知ることができるなどの利点がある。また、そこから新たな発見が見い出せる可能性がある。現代でも自分の考えをなかなか述べるににくいことが多い日本の社会において、自由討論は大変評価でき、ここから研究のさらなる進展が見られたであろう。

2-4. 松阪の一夜について

最後に、国学の大きな進展に寄与した「松阪の一夜」について触れる。「松阪の一夜」については、「宣長は憧れの真淵先生に松坂の旅宿“新上屋”で出会い、学問について教えを受け、弟子入りの内諾を得ました。この一期一会の出会い「松坂の一夜」がなければ「古事記伝」はできなかったとさえ言われています。…（中略）…「真淵先生に会いたい」と宣長を熱望させたものこそ、…（中略）…真淵の著書「冠辞考」でした。

万葉集などでの枕詞の用例や語源等の解釈を付けた本で…（中略）…冠辞考を通じて真淵の学問にふれ、古代の言葉への造詣の深い学者がいることを知ったのです。宣長は著書「玉勝間」の中で、「（冠辞考を）見るたびに信じる心の出来つつ、ついに、いにしえぶりの冠辞考は、枕ことばを五十音順に並べ、こころことばの、まことに然る事をさとりぬ」と記し、真淵の冠辞考から古事記の解説に向けての光明を得たことを述べています。（『奇跡の「松坂の一夜（ひとよ）」「冠辞考（か

んじこう）が結ぶ真淵と宣長』より一部引用）」とある。

また、松阪の一夜で語られた話題の一部として、「古事記研究のためには、万葉集の解明・味読こそが急務であるとの真淵の訓えに従い、宣長はその指導（質疑）を希い、真淵はその教導（応答）を約したこと」「万葉研究のためには、古風（万葉風）の歌を詠むことが必須の要件であるとの真淵の言を受けて、宣長はその指導（添削・批評）を乞い、真淵はそれを容れたこと」（「」内は、『宣長学論究』岩田隆著、10 ページから引用）がある。

この松坂の一夜から、本居宣長が万葉集の解釈を深めることができるようになり、これによって本居宣長が古事記をより深く、そしてより早く理解できるようになったと言えるのではないだろうか。古言の大切さ、そして古意を得るために古言を得る。真淵の古い言葉大切に、ありのままの古言を理解することを、本居宣長が認識し、万葉集を究めた上で、古事記を深く理解していったと思われる。

宣長は、古人の言葉をきちんと理解するという土台を得て、目的を達成することができた。真淵の宣長への指導は熱を運び、数多くの添削や指導を重ね、この真淵の教えは、確実に宣長の成長および研究の発展に寄与した。古事記の研究のために、万葉集を学ぶ。万葉集について長年研究し、理解を深めていた真淵から直接教えを受けた宣長は、万葉集の理解をスムーズに深めることができた。それがその先の古事記の研究に大いに役立ち、これによって宣長が「古事記伝」を完成させることができたとも言えるのではないだろうか。言い換えると、宣長が「古事記伝」を完成させたのであるが、その宣長を直接指導した真淵もまた古事記の研究の発展に寄与したとも言えるであろう。

この歴史的な一夜は、日本の国学の大きな進展となったと考えられる。この松阪の一夜

の賀茂真淵と本居宣長との運命の出会いが、その後の日本の国学を大きく進展させ、日本の歴史を変えたとも言える。

賀茂真淵と本居宣長が面会したのは一度だけであるが、その後、かなりの頻度の文通を行っていたことは周知の事実であり、この一度の面会が日本の国学の発展に大きく寄与したことは喜ばしい。

われわれは、真淵の業績によって、国学をわかりやすく学ぶことができている。賀茂真淵の業績は、高く評価できるものであり、価値あるものであろう。

【参考文献】

1. 「賀茂真淵とその門流」 真淵生誕
三百年記念論文集刊行会編
2. 「賀茂真淵の研究」 高野奈未著
株式会社青簡舎発行
3. 「賀茂真淵先生」 賀茂真淵先生編集
委員会編集・発行
4. 「真淵と宣長 ―「松阪の一夜」の
史実と真実」 田中康二著
中央公論新社発行
5. 「宣長学論究」 岩田隆著
株式会社おうふう発行